



日韓合同授業研究会会報

# 第102号

2016年1月24日発行

## 韓国と日本をつなぐ仕事

立教大学 石坂浩一

### 年末の日韓合意を聞いて

2015年の年末にあわただしく日韓両政府の「慰安婦」問題をめぐる合意のニュースを聞きました。これまでいろいろ尽力されてきた人たちにとっても、唐突で意外な決着であったようです。財団を作って「心の傷を癒すための事業」を行なうということですが、「心の傷を癒す事業」がどのようなものか、その内容を誰が決めるのでしょうか。何より、すでに戦後70年もがたってしまった状況の中で、当事者のハルモニたちを差し置いて無理に年内に合意しなくてはならない理由がどこにあったのでしょうか。

今回の外相記者発表を読んでみると、何の価値もない合意ではないように思われます。あの安倍首相が政府の責任を認めたとか、河野談話にあった「軍の関与」を認めることを維持したとか——元来安倍晋三という人が認めないといっていたことがらが含まれているのですから、それは日韓の世論の力でしょう。不十分ですが、意味があります。しかし、社会の共感をもとに合意形成をするのではなく、政治家が政治的な「妥結」（この言葉は昨年の日韓首脳会談のころから意識的に使われていた言葉のようです）を急ぐあまり、「最終的かつ不可逆的」などと核問題顔負けの文言を使っては、社会的に受け入れられるはずがありません。その意味では、アジア女性基金の失敗を、もっとよくない形で踏襲したようなところがあります。

ところで、外相発表の岸田文雄外相の発言部分では事業を「着実に実施するとの前提で・・・解決されることを確認する」となっています。岸田外相はこの「事業」について医療サービスなどを考えていると、記者発表のあとで述べていますが、この歴史を記憶し後世に伝える作業を「事業」に掲げたのであれば、ずいぶんと今回の合意の意味合いがちがったことでしょう。もちろん、それは今の首相ではできないことでしょうが。

その後、韓国挺身隊問題対策協議会（挺隊協）は独自の財団を作るという方向性を韓国

### 目次

韓国と日本をつなぐ仕事	1
革工芸ワークショップ	5
『日本の朝鮮侵略史研究の先駆者 歴史家山辺健太郎と現代』	7
学習会案内、短信	8

Pa

で投げかけ、相当の反響を得ているようです。日本でも本来は、日韓共同の財団とか事業を考えるのであれば、もっと教育や記憶のためにこういうことをしたらどうか、悲惨な歴史を繰り返さないために何ができるのか、といった声が日本政府に突き付けられることが、これまでになく求められていたのではないかと思います。日本国内にはヒントになるような事例がいくつもあるでしょう。ヒロシマ、ナガサキの原爆被害者の語り部たち、核の恐ろしさを伝える施設、歴史を伝える記録の映像やさまざまなメディアでの制作・・・それが何か、日韓関係が悪化しているのを何とかしなくては、というレベルに切り縮められてしまったことで、マスコミが政権のリークに流され、望ましくない合意がどんどん作られてしまったのではないかと思います。

韓国では強制連行や「慰安婦」問題について、歴史を記憶する学びの場が意識的に作られようとしているようで、平和博物館などの構想もあります。かつて1980年代に教科書問題をきっかけにして、韓国内で「日本にかつ（克つ）のだ」という国家主義的観点から独立記念館が作られました。しかし、民主化以降は、韓国みずから加害の歴史を直視するためにベトナム戦争での韓国軍による残虐行為への反省や移住者の権利の問題への取り組みが呼びかけられ、歴史はより総体的にとらえることで教訓として生かされるのだという認識になっているのではないかと思います。

日本では「女たちの戦争と平和資料館」が東京にあり、戦時性暴力について歴史的資料に基づいた認識と記憶のために活動しています。日本の各地域で歴史との関わりを記憶し伝える作業がもっと広がって、こうした資料館を生かせるようにしたいものです。そういう仕事に関わる人たちをきちんと育成することが、より良い未来を築くカギになると思うからです。

## シンポジウムの開催

話がずいぶんそれてしまいましたが、立教大学 平和・コミュニティ研究機構では2015年12月11日に「韓国と日本をつなぐ仕事」というシンポジウムを行ないました。このテーマを考えるに至った当初の理由は単純です。大学で朝鮮語を学び、また韓国にも研修に行ったり留学したりして、さて卒業して朝鮮語を使ったり、韓国に関わったりする仕事がないものかと探すけれども、ほとんどない、という現実をこれまで目の当たりにしてきて、どうにかならないものかと思ったからです。史学科の大学院を出ながら、朝鮮語の教員になったという自分のことを考えても、学生たちの進路について大人としてもう少しできることがないだろうか、というのが出発点でした。

韓国企業の日本への進出が増えたことから、サムスンやCJなど韓国企業（日本支社）に就職した卒業生は少しいます。しかし、それは全体からみるとごくわずかだといえるでしょう。通訳や翻訳の仕事をしようとする卒業生もいて、この間、立教の卒業生が3人、梨花女子大の通訳翻訳大学院を修了しました。これは専門職ですので、ある程度ものになるまで年数がかかります。大学の教員も同じです。何をしても楽な道はないとはいえ、やはり「韓国と日本をつなぐ仕事」の道が狭すぎる、それを少しでも広げるために意識的にできることを探っていくべきではないか、そう考えるようになりました。

そして、そういう仕事を増やすためには、社会的に韓国と日本の関係を大切にしようという認識や雰囲気を広げ、それに関わる仕事があつたずさわる人がいるのが当たり前になることが大切ではないかと思いました。それは、2000年代に入ってから2度のいわゆる韓流ブームにより、それまでなかなか仕事がなかった人たちが、ドラマの字幕や翻訳など、いろいろな仕事を得ることができるようになった状況にも触発されています。歴史的に見ると、韓国人は日本を知っていて、日本語も多くの人がわかっているが、日本では韓国のことをよく知らず、朝鮮語もできる人は少ない（近年はいくぶん改善されましたが）、そのことを不思議に思う人があまりいなかったの

ではないかと思いますが、だんだんと状況は変わりつつあるということです。

そこで、日韓国交正常化50周年の節目でもあり、シンポジウムを企画しました。「韓国と日本をつなぐ仕事」について、ふたつの角度から取り組んでこられた方をお招きしました。一人は名古屋で株式会社を営まれ、言葉を通じて韓国とつながる仕事をされてきた韓さん、もう一人は川崎のふれあい館で長く働き館長もされた三浦さんです。ここでは紹介しきれませんが、コメンテーターとしてNHKの国際放送通訳や会議通訳を長年務めてこられ立教大学の兼任講師でもある矢野さんにお越しいただきました。

韓さんは学生時代からいろいろ社会的な活動をされて、指紋押捺拒否運動でも知られているので、お名前をご存知の方もいらっしゃるでしょう。韓さんは自己否定に陥りやすい在日コリアンとしての自分のあり方を反転させるため韓国留学できっかけをつかみ、会社を作りました。韓国語教材やグッズの販売から、言葉を学ぶ場としてのマルマダンまで、韓国と日本の架橋になるという夢をめざして会社を作ったのでした。市民団体はボランティアで支えられた、継続性としては保障されない活動ですが、事業化により継続性を確保していくことができます。

韓さんのお話を聞いていて、韓国に行って言葉を学ぶまでは日本に対する恨みのようなものがあつたが、言葉を知り韓国を知っていくことで、そうした恨みのようなものがスーッと消えて行った、というエピソードはとても印象的でした。そして、日本を中から見る目と韓国を外から見る目だけでなく、韓国で暮らして学んだことで日本を外から見る目と韓国を中から見る目を見出し、日韓を4つの目で見ることができるのだという発想の新鮮さに感銘を受けました。そうした経験をこれからの世代に伝えていきたいと今の事業をされているのです。

経済状況の悪化などでここ1、2年むずかしさはあるようですが、ニーズがあれば事業化は可能だという信念で韓さんは仕事をつづけています。夢としてコリアン・カルチャーセンターの設立と沖縄に東アジアの平和をテーマにしたゲストハウス設立があるそうです。

三浦さんは学生時代に川崎を中心に起こった日立就職差別への抗議、裁判の運動に関わりました。そこから、地域を変えていくことで、差別をひとつひとつなくし、そこにいる在日コリアンなどのマイノリティとともにみんなが暮らしやすい街づくりに取り組みました。在日の教会に依拠する社会福祉法人青丘社が運営する川崎南部地域のふれあい館を1988年に設立し、川崎市の地方自治体の責任を問いつつ地域住民とともに地域づくりをしていく事業に携わってきました。初めは青少年の教育事業が中心でしたが、在日コリアン高齢者の取り組み、しょうがいのある子どもたちとともに暮らす街作りなど、次第に事業を拡大してきました。

三浦さんは、川崎南部地域に暮らす在日コリアンとの交流、協働の中で、地域に刻まれた在日の高齢者の歴史を知り、川崎地域における在日コリアンの存在を認識し、地域の中に存在する差別から目をそらさずに、自由で開かれた地域のあり方を模索してきました。その隣人としての大切さと労苦の歴史を知ろうとする志が、在日コリアンに限らずさまざまな人びとと共に歩み暮らす地域づくりを問いつけるエネルギーになったのだらうと考えさせられました。三浦さんが当日紹介してくれた青丘社のリーフレットを見ると、移住者の子どもたちの学習支援、高齢者のデイ・サービス、しょうがいしゃの雇用や共同生活支援など、在日コリアンから始まった事業や活動が、地域の暮らしになくてはならない仕事に広がっている様子がうかがえます。



おふたりのお話はその生きてきた軌跡を通じて、いろいろなことを考えさせ、示唆に富んでいました。問題は、日本政府が多文化共生という看板を掲げながら、外交努力を怠り東北アジアの人びとを憂慮させる軍事大国化政策をとっていたり、地域の福祉や人権の課題について実質的に取り組まないでいたりする現実です。

華やかな事業が注目されがちな今の時代に、こうした話はかき消されがちですが、韓さんも三浦さんもこれまで楽に事業をしてきたわけではないので、こうしたお話を教訓として、励ましとして、私たちはよりよい仕事を日本の社会に定着させていくための努力を続けたいと思います。その意味では、大学自身が就職率を上げることに神経を使わねばならない現状についても、一度考えなくてはいけないと思っています。大切なことは何かということを考える、人間の根源にあるものを問う、もし自分が働いている会社がなくなったら明日からどう生きていくかを考える心の準備や知識を伝え、生きていくための姿勢を養うのが教育機関としての大学の使命ではないかと思っています。私たち自身も変わらなくてはいけないという自戒を込め、今回のシンポジウムを行いました。

私としては、新しく起業に取り組むマイノリティの若者が活躍することも期待しています。ある意味、ソフトバンクの孫正義さんもそういう存在です。こうした「つなぐ仕事」についての企画は今後も続けて行ければいいと考えているところです。なお、このシンポジウムの記録は立教大学 平和・コミュニティ研究機構の紀要に掲載される予定です。

## 第22回交流会 潮来大会

7月29日（金）から8月1日（月）

第22回交流会 潮来大会の下見に行ってきました。

メンバーは、安藤実行委員長、吉川、佐藤、藤田です。

潮来は安藤さん吉川さんの地元です。特に吉川さんは、ホテルの近くを歩くと、ここは卒業生の家、ここは・・・といった具合でした。

ホテルは二人が職場の忘年会などで使うところで、大きな宴会場がいくつもあるところです。近くには利根川が流れていて、美しい場所です。

ホテルの配慮も行き届いていました。



ホテル外観



利根川に浮かぶ屋形船

# 革工芸ワークショップ

～産業・教育資料室きねがわ～

日韓合同授業研究会をみなさんに知っていただくための活動の一環として、昨年11月28日(土)に革工芸のワークショップを「産業・教育資料室きねがわ」のご協力で行いました。前号でもお伝えしましたが、今回は参加した東京韓国学校の高校生4人の感想文です。日本語で書いてくれました。



## ユビン

今日、歴史の部活で皮の歴史について調べた。どこでするか知らなくて迷ってからやっと訪れたが、遅れてしまって初めの映像は見られなかった。

皮の歴史と作られる過程について説明を聞いたが、日本語で説明してくださって聞き取りにくかった。しかし、私たちのために易しい単語でいろいろなものを見せてくれながら説明してくれた。

説明を聞いた後、皮についての童話を見たが、その童話の内容は死んだ動物の皮や骨など様々な部分を使用して新しいものに生まれ変わるようにすること、それで動物は捨てる場所が一つもないということを知らせてくれる内容だ。

その童話を見て私は皮についてまた考えて見るようになった。そのまま簡単に意味なく作られるものではなく、多くの意味を持っていると感じた。

その後、私が自分で皮を選んで紐を選んでハンマーを使って筆箱を作った。

私は感じがちょっと柔らかめの皮で作ったが、皮に穴を開けるのが思ったより大変だった。ハンマーで5回ほど強くに叩いてこそ、破られたために大変で時間も長くかかった。代わりに皮紐を穴に差し込むものは簡単で早く終わらせることができ、私が一番先に完成させる事ができた。

私の後ろに座った方はとても硬くて見せて光が出ている皮を選びましたが、穴を開けるのが他の人々に比べてもっと大変にみえたし、穴もきれいに建設されなかった。

それで皮ごとに開け方や強さなどを全部変えなきゃと思った。

すべてのプログラムを終えてプレゼントに豚の皮で作ったしおりをもらったが、豚の皮であるためなのか、もっと不思議だった。

生きている豚の皮と豚の皮の感じははっきり違っていたが、とてもしっかりしていて少し人工的な感じがした。

様々な体験をして説明を聞きながら私たちの生活の中でたくさん接し、関心や知識はあまりなかった皮について知ることができておもしろい時間だった。

ソンハ

私は歴史のサークルで革の歴史について学びに行ってきた。そこには講師たちと私と一緒に学びに来た方々がたくさんいた。我々は差別に関する話も聞いて、皮がどうやって作られるかについて動画を見た。また、直接皮で可愛い筆箱ケースも作った。全部終わってから、しおりも分けてくれて嬉しかった。革についてあまり関心なかったが、今回の体験を通じて我々のまわりに革が多くあるということを感じた。これから良い人と一緒にもっといろんな所に学びに行きたい!

## ハヨン

今日、歴史サークルで（ワークショップに）行きました。残念ながら前の模擬試験のために遅れて行ったにもかかわらず、誰も話を出さず、むしろより親切にしてくださって本当にありがとうございました。そこから革の歴史について学びました。まだ日本語がよくできなくても聞き取れず一緒に行った友人が通訳をしてくれたおかげで、幸いなことに、ある程度は理解できました。そこがなぜ臭いが上限（して、）人々が嫌いかどうかの理由を聞いてきた革とオイルを作成するときに、私は臭いのために、人々が嫌いだと言いました。そのほか、革で作られたものは、その地域の油、革の歴史と作られたところ、変わった点を見つめていた昔から伝わる童話も見ました。以来、私たちは直接手作りペンケースを作りました。私が欲しい色で作ることができました。それはお金もかからず、その静かな環境が良かったです。また、そこに教えてくれる講師の方がとても親切によくいただき、次の機会があればまたお会いして欲しいと思います。

## ヘミン

今年 11 月 28 日土曜日に歴史サークル部員たちと一緒に「産業・教育資料室きねがわ」を訪問しました。講義を聞いて体験をした場所である「産業・教育資料室きねがわ」の歴史に対する説明を聞きながら、そこがどのように作られ、どのような仕事をする所なのかについて学びました。そこに対する歴史を学び、よく知らなかった歴史を学ぶことができ本当に良かったです。皮が作られる過程に関する動画を見て、皮が作られるまでには長い時間がかかるのを理解しながら、本当に大変だと思いました。そして皮を作るために努力する方々がすごいと思いました。今まで、一度も皮がどうやってできるのかについて関心なかったが、今回の活動をきっかけに皮で作った物を使う度に、皮が作られる過程を考えて見て使うようになりました。また、よかったのは皮で筆箱を作る体験をしたことです。学ぶことにとどまらず、直接体験したのが本当に良かったです。今回の活動で多くのことを学ぶことができ、また機会があれば参加したいです。



## 『日本の朝鮮侵略史研究の先駆者

# 歴史家山辺健太郎と現代』

中塚明著 2015年 高文研

波多野淑子



近代の日朝関係史に関する一般向け啓蒙書がまだ乏しかった1966年、山辺健太郎は『日韓併合小史』を、続いて『日本統治下の朝鮮』を岩波新書として出版した。1905年に生まれ、戦前は労働運動に傾倒して日本共産黨員になり、2度にわたって合計8年間獄中生活を送った山辺が日朝関係史を研究するようになったのには、二つの契機があった。ひとつは獄中で金天海という朝鮮人の社会運動家に出会って日本統治下の朝鮮の状況を知ったことであり、もうひとつは日本資本主義発達史を研究する中で、資本の蓄積において朝鮮からの収奪が果たした役割に気づいたことだった。そこからかれ

は日本近代史を理解するためには朝鮮侵略の問題を研究することが不可欠である、また歴史の真実は権力によって隠され歪曲されているから、第一次史料に基づいて研究しなければならない、という信念を得て、国会図書館の憲政資料室に通って膨大な資料を筆写することから研究を始めた。

実は山辺は小学校を出ただけの学歴で、労働運動をする中で必要に迫られて社会主義理論や英独仏の語学を自ら学んだのだったが、かれのこのような真摯な姿勢は後進の多くの研究者に影響をあたえてさらにすぐれた研究を生んだ。

本書は長年山辺に私淑し親しく交わった、日朝関係史の研究者中塚明が、山辺の発言やさまざまな人のことばを引用しつつ、山辺の業績を明らかにしている。それは、憲政資料室のほとんどの主要文書を点検して日本の朝鮮侵略の事実を明らかにしようとする努力、しかも恣意的な解釈は控えて「歴史の『原状況』を洗い出し」て誰でもが利用できるようにしたところにあり、まさにこの分野の開拓者の役割を果たしたのだった。

中塚は最後に、わたしたちは山辺の姿勢を継承すべきであり、司馬遼太郎に象徴される「明治は栄光の時代であり、無謀なアジア・太平洋戦争によって日本はすべてを失った」という広く一般に浸透している見方は、明治の戦争が朝鮮侵略を目的としておこなわれた事実を故意に見逃した歴史認識であること、また、「自由と人権を愛し、法と秩序を重んじて、戦争を憎み、ひたぶるに、ただひたぶるに平和を追求する一本の道を、日本は一度としてぶれることなく、何世代にもわたって歩んできました。」(2014年5月30日、第13回アジア安全保障会議基調講演)という安倍晋三首相の発言が、いかに事実と異なる破廉恥なものであるかにも言及して、このような歴史の偽造をいつまでも続けることに警鐘を鳴らしている。

山辺健太郎は、生涯在野の研究者として貧しく暮らした。地質学者の夫人と6匹の猫たちと住む団地の部屋は足の踏み場もないほど本で埋め尽くされ、その上に布団を敷いて寝るありさまだったが「時は金なり。ぼくは、金はないが時間はたくさんあるから金持ちだよ」と朗らかに言い、

素朴で率直で山歩きと猫と子どもを愛した人だった。

## 日韓合同授業研究会学習会のお知らせ 「さかのぼり日本史」

歴史をさかのぼると、時代の本質が見える。歴史には、時代の流れを決定づけた重要なターニングポイントがある。今私たちはその歴史をさかのぼり、時代の本質を明らかにしたい。現在起きている排外主義、ヘイトスピーチ、それは関東大震災さらには明治維新、日本のアジア侵略まで歴史をさかのぼる。

### 「関東大震災朝鮮人虐殺からヘイトまで」

—恒久平和と国際友好は真実の直視から築かれる—

**講師 鈴木孝雄さん** 日本弁護士連合会 人権擁護委員長

中国残留邦人問題小委員長 外国人問題小委員長 難民問題対策小委員長 外国人学校の資格と助成問題小委員長として、「朝鮮高級学校の高体連の大会参加」「外国人学校の資格と助成」問題を担当提言。

今年7月29日から8月1日に行われる日韓合同授業研究会第22回交流会潮来大会で、千葉の関東大震災における朝鮮人虐殺を取り上げようと計画しています。多文化共生社会が進んでいる一方で、排外主義やヘイトスピーチがまかり通るこの時代に、もう一度歴史から学んでみたいと考えています。そこで、交流会に向けて学習会を行うことになりました。関東大震災、さらには「日韓併合」、日本の中国侵略、南京大虐殺など、明治維新後から現在に至る歴史の中で見えた日本の体質にまで言及し、恒久平和と国際友好について考えます。

今回「外国人学校の資格と助成に関する委員会委員長」として、国連の「子どもの権利条約に関する委員会」に意見書を提出するなど平和と人権のために活躍されている鈴木孝雄先生にお話を伺います。

日時 1月31日(日) 15:00から17:00

場所 しんじゅく多文化共生プラザ(ハイジア11階)

参加費 無料 初めの方歓迎です。

## 短信

○年末に日韓首脳が従軍慰安婦をめぐる、当事者の声を聞くことなく手を打ったかと思うと、正月には水爆実験。民衆の声を聞こうとしない為政者の言動に振り回されて、また子どもたちがいわれのない差別を受けるのではと心配になります。

○今年交流会が行われる潮来ホテルの下見に行ってきました。目の前を利根川が流れる美しいところです。7月29日から8月1日です。東京駅からバスで約1時間半。ぜひご参加ください。

○事務所住所を石井法律事務所になりました。長年お世話になっていた吉峯弁護士事務所に感謝致します。(F)

ウリ102号 2016年1月24日

日韓合同授業研究会

代表E-mail

larribee1991@yahoo.co.jp